
青年の異世界冒険記

ヌケニン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青年の異世界冒険記

【Nコード】

N9287W

【作者名】

ヌケニン

【あらすじ】

普通に暮らしていた普通の青年がトラックにはねられ異世界に転生した。

この物語は異世界に転生してしまった普通の青年の冒険記である。

プロローグ

俺は今、草原にいる。

広い広い草原に・・・・・・・・・・

俺は東京のあるアパートに住んでいた。

今日の仕事も終わり、週末なのでテレビを見てくつろいでいた。

そんな時、ふと晩飯を食べていないことに気が付いた。

そのため、俺は飯を買いに行くことにした。

すると、横断歩道に突然大型トラックが突っ込んできた。

そして、そこで俺の意識が・・・・・・・・途切れた。

次に目覚めたのは、真っ白な部屋だった。

そこには自分を神様と名乗るじいさんが1人いた。

そして、こんなことを言われた。

「おぬし・・・・・・・・転生してみないか？」

訳が分からなかった。

一日目「転生」

「おぬし、転生してみないか？」

突然そんなことを言われて頭が混乱した。そしてようやく出てきた言葉は

「え？」

という突拍子な言葉だった。

「転生じゃよ、転生。言葉の意味が分からなかったか？」

「いや、言葉の意味は分かりますが・・・・・・・・」

この爺さんの言っていることが分からない。

「そついえば自己紹介がまだじゃったな、わしは神様じゃ」

・・・・・・・・・・は？

「いや、何言ってるんですか。」

まったく訳が分からない

「いや、だからわしは神様じゃって」

「それはマジの話ですか？」

「マジの話じゃ」

• • • • •
• • • • •
• • • • •
• • • • •

いったん整理してみるか・ ・ ・ ・ ・

俺は確か夕飯の買い物に出かけた。

そして横断歩道でトラックが突っ込んできて……

目が覚めたらこの変な白い空間に来ていた……

ダメだ。さっぱり分かん。

と言うことはこの爺さんは本当に神様なのか？

「本当じゃよ」

「心読めるのか!？」

「読めるよ」

迂闊に物を考えられないじゃないか・

そんなこんなで、取り合えず自己紹介をすることにした。

「俺の名前は『上坂亮谷』かみざかりようやです。」

「そうかそうか。で、転生してみないか？」

そうだった・・・・・・・・・・転生の話だったな・・・・・・・・

「転生って一体どんなことするんですか？」

「簡単に言えばおぬしを別の世界に飛ばすのじゃ」

うん、さっぱりだ。

「いくつか質問していいですか？」

取り合えず分からないことは質問してみることにした。

「いいぞ？」

「まず、あなたは誰ですか？」

「さっきから言ってるじゃろ、神様じゃて」

どうやら、このことを変えるのはないようだ。

「次の質問です。僕は死んだのですか？」

「トラックに轢かれて事故死したのう」

どうやら死んでしまったようだ。

「次です。転生するとして、どこに行くのですか？」

「魔法とか魔物とかがあるところじゃの。基本的に食生活はおぬしが住んでいた世界となんら変わりはない。」

ふむ、魔法か……行きたくなってきたな……

「これで最後です。どうして僕を転生させてくれるのですか？」

正直言っただれがいちばん聞きたかった。

「おぬしが善行を沢山しておったからじゃ。」

「たとえば……どんな？」

「おばあさんの荷物を運ぶこと50回、ボランティアに参加すること数百回、他にも見知らぬ人が怪我をしたら手当てをしてあげるとか色々やっておった」

「……死んだあとに善行の付けが回ってくるとは、予想外だった。」

「分かりました……で、転生の話に戻りますが、俺の記憶を保ったまま転生できるんでしょうか？」

「当然じゃ、そうじゃなきゃおぬしに確認なんぞとらん」

そりゃそうか……

「分かりました。じゃあ転生お願いします。」

「分かった。と言いたいが……」

？何か問題でもあるんだろうか？

「何か問題あるんですか？」

「実は……わしの力をおぬしを呼ぶのに使ってしまったて転生させるにはエネルギーが足りないんじゃない。明日まで待ってもらうことになる。」

なんだ、そんなことが

「そういうことなら待ちますよ」

「そうか、良かった良かった。それじゃあそこで一日過ごしてくれ。欲しい物は念じたら大体出てくるからの」

「分かりました」

こうして、暫く時間をもてあますことになった。

「目目」「転生」（後書き）

誤字脱字は発見次第、修正していきます。
感想やご意見、評価などお待ちしております。

二日目「時間の使い方」

「さて、どうしようかな」

念じれば大体のものが出てくる……か

よく考えたらまだ夕飯食べてなかったな。

何を食べようか……

「牛丼にしようかな」

死ぬ数分前まで牛丼食べる気でいたし

「えっと、牛丼を思い浮かべればいいのか？」

牛丼を頭の中に思い浮かべていると、すぐに牛丼（普通盛）が出てきた。

「おお、本当に出てきた。」

俺って少々なことじゃあ驚かないな……

「次は箸か。」

こちらもすぐに出てきた。

「それじゃあ、頂きます」

数十分後

「ご馳走様でした。」

こういうことはきっちりしておかないとな

「さて、片付けるか……………って言っても流し台がないんだよな」

「もしかしてこういうのも念じたら出るのか？」

流し台……………流し台……………

「本当に出やがった……………」

ま、いいか

数分後

「することなくなっちまったなあ……………」

次の日までまだ先だし……………

「寝るかあ」

すぐにベッドを想像して作り出し、そのベッドの上で横になった。

「それにしても転生かあ……………」

色々な事が起こったなあ……………

俺が死んだり、神様とか名乗る爺さんにであったり、転生することになったり……

「あ」

そういえば、転生するのは良いとして、年齢はどうなるんだろうか

「……明日聞くか」

こうして、俺は眠りについた。

二日目「時間の使い方」(後書き)

誤字脱字は発見次第修正します。

あと、タイトルにある一日目とか二日目とかは話数になります。

三日目「異世界到着」

次の日の朝

「転生の準備が出来たぞ！ほれ、起きんか」

いきなり爺さんにたたき起こされた。

「まだ6時じゃないですか・・・もう少し寝かせてください・・・」

まだ眠いんだ！起きてやるもんか

「仕方ないのう・・・転生を取り消すか・・・」

「起きました！目が覚めました！！」

なんて怖い事言いやがるこの爺さん！

「あ、神様。もうひとつ質問いいですか？」

昨日聞き忘れた転生したときの年齢を聞いとかないと

「ん？何じゃ？」

「俺が転生したときの年齢っていくつなんですかね？」

「おお、そういえば聞いてなかったの。いくつが良いんじゃ？」

え？これって決めれるの？

「こっちで決めて良いんですか？」

「もちろんじゃとも。ほれ、早く言わんか。」

うーん……どうしようか

「ちょっと考えさせてください……」

「しょうがないのう……。10分だけ待ってやろつ。その間に良く考えるのじゃ。」

10分か……。早く考えないとな。

「子供だと色々不便だし、かといって大人にするとその分動ける時間が減りそうだし……」

よし、決めた。

「神様、16歳をお願いします。」

「中途半端な年齢じゃのう。それで良いのか？」

「はい、これで良いです。」

16歳ぐらいなら両方の問題クリアできるしな。ちなみに俺の本当の年齢は25歳だ。

「よし、分かった。それじゃあ転生させるぞ。目を閉じて暫くそこ

に立つとれ」

「分かりました。」

おそらく、これから神様のチート能力で異世界に飛ばされるんだろう。目を閉じているからどんなことをしているか分からないが。

沈黙の時間が続いた。目を閉じろと言われて5分ぐらい経っただろうか。

「もう開けてよいぞ。」

爺さんの声が聞こえたので、目を開けると……………

「うわぁ……………」

そこには広い広い草原があった。

さて、話を戻そうか。

さっきまでは全て俺の回想である。

これからどうすべきか考えなければならない。

「……………民家を探すか……………」

民家があれば近くに町があるかもしれない。

こうして、俺の異世界の冒険が始まったのである。

三目「異世界到着」(後書き)

誤字脱字は発見次第修正します。

四日目「遭遇」

「歩いてても歩いててもあたり一面草原・・・・・・・・」

広い草原を歩き始めて約1時間、俺はまだ人どころか人が住んでいた跡すら見つけられなかった。

「おぬしも大変じゃのう」

あの爺さんはどうやら俺が1時間ほど前にいた場所から話しかけているらしい。

「喉・・・・・・・・乾いたなあ・・・」

どこかに水ないかな・・・・・・・・

「なんじゃ、最近の若者はなつとらんのう」

一時間のまず食わず出歩いてきた俺としては、お前もやってみろ！と言いたくなるが、相手は神様なのでやめておくことにした。

「それにしても、本当に何もない草原だな」

身を隠せる場所が多くても困るけどまったく無いってのも困るな・・・・・・・・

「だめだ！休憩しよう」

本当、どうしたら良いんだろう。そうやって途方に暮れていると、

突然、地鳴りが起きた。

「何だ！地震か？」

そうやってあたりを見渡すと、何かがこちらに迫ってくるのが見えた。

「何だあれ！」

とっ取り合えず逃げない！

「あれは……動物の群れじゃな」

「動物の群れ！？」

「おぬしの世界で言う、牛とか馬とか」

ああ、なるほど、そんな群れが俺に近づいてきてるってことは……

「ラッキー！」

あいつらについていけば、飲み物とか手に入るかもしれない！

「あ」

今俺って、追いかけてるんだっけ

数分後、俺は泉に来ていた。

「しかし、人間本気になるとあそこまで早く走れるんじやのう」

そう、俺はさっきの群れから走って逃げて、命からがら逃れたのだ。

「だけどそのお陰で、水が飲めるようになりましたよ」

本当にありがたい。これで喉を潤せる。とはいえ、未だに人を見ていないので楽観は出来ないが。

「そういえば……さっきから背中に何かあるんだけど。」

「ああ、すっかり忘れておったわ。それはわしからの餞別じゃ。」

餞別？何が入ってるんだろう

「その中には五日分の食料とかが入っておる」

「へえ、そうなんですかあ。」

そうだったのかあ……え？

「まさか……俺が転生したときには既に？」

「もっておったのう。」

そういうことは先に伝えておいて欲しい……

「どうしたのじゃ？急に二歳ほどふけて見えるのじゃが……」

「何でもありませんよ………」

取り合えず、先に進むか

それから数十分、やはり人に会うことは無かった。

本当にこの世界に人はいるのだろうか。そう途方に暮れていると、遠くに人影が見えた。

このチャンスを逃すわけには行かない！

「すいませ〜ん」

その呼びかけに向こうも気づいたようで

「はい〜。何でしょうか〜」

と答えてくれた。その人は、男の人のようで、こつい身体つきをしていた。

「あの〜、この近くに村とか町とかないでしょうか？」

「この近くには無いですねえ……、もしかして、旅の方ですか？」

ん？もしかしてとめてくれるフラグとか立ったりして

「はい。そのとおりです。」

「そうですか。それは大変だったでしょう。もしよければうちで止まっていけますか？ 街までの行き方もお教えいたしますし。」

なんとという幸運。何このご都合主義みたいな展開。

「そちらが宜しいのでしたらぜひお願いします！」

この展開を逃さ無い訳は無い！

「うちの家はこちらです。付いてきてください。」

こうして、こちら辺に住んでいるっぽい人に泊めてもらうことになった。

四日目「遭遇」（後書き）

誤字脱字は発見次第修正いたします。

五日目「異世界の常識」(前書き)

ストックが切れたため。しばらく更新速度が遅くなります。

五日目「異世界の常識」

俺は今、こちら辺に住んでいるらしい人にとめてもらうつことになり、その家に案内してもらっているところだ。

「ここです」

男に案内されてついた家は、なかなか大きく、2階建てのレンガ造りの家だった。

「なかなか大きいですね。」

と、俺が言つと

「いえいえ、そんなに大きくないですよ、家を持っている人ならこれぐらいが普通ですって。」

ふむ、そうなのか、

「取り合えず、中にお入り下さい。」

と、言われたので、入ることにした。

「そのこのいすにでも腰掛けてください。」

部屋の中の感想は………なんというか普通だった。何かの本に出てきてそうな暖炉とか、外国の家にありそうなテーブルとか。

まあいいか。

「分かりました。」

と言って腰掛けることにした。

「どうぞ」

男はお茶をテーブルに出した。

「頂きます。」

と言って、それを飲むことにした。

お茶の味は、日本とそんなに変わらなかった。

「ご馳走様でした。そういえば自己紹介まだでしたね。」

「そうでしたね、じゃあ私から、私の名前はアルスです。」

どっかで聞いたような名前だな……

「俺は亮谷です。」

「リョウヤ……………珍しい名前ですね。」

あ、ここ異世界だから日本名やばいんじゃないのか？

「一体、どこに住んでいたんですか？」

ううん……………どうしようか……………

よし、記憶喪失ということにしよう。

「実は・・・・・・・・記憶をなくしてしまったみたいなんです。」

「そうなんですか・・・・・・・・」

「宜しければ、この世界のことを教えていただけませんか？」

これで聞き出せばいいんだけど・・・・・・・・

「私の知っている範囲でよければ」

よし来た！！

「ぜひ、お願いします。」

「分かりました。まず、この草原ですが、ここは、カルト大草原という世界一広い草原です。」

確かにものすごく広かったな。

「そして、この家はそのカルト大草原の西側にあります。」

「なるほど、ちなみに明日案内していただける町はどんな町ですか？」

一応聞いておいたほうが良いかな

「その町はリックと言って小さい町です。」

小さい町……ねえ

「分かりました。あと、基本的な知識とかもお願いできますかね？」

「お金とかですか？」

「ええ、そうです。」

これ聞いておかないとやばいしな。

「ええと、お金の単位はシルです。大体1人で外食するとき払う金額は5〜600シルぐらいです。」

おお、ありがたいことに金銭感覚まで言ってくれた。どうやら日本円と殆ど代わりが無いようだ。

「私が伝えられるのはこれぐらいですかね。」

「ありがとうございます。助かります。」

「いえいえ、そろそろ夕飯ですね、何か作ります。」

色々教えてもらっているうちに夜になっていたようだ。時が過ぎるのは早いなあ……

「あ、いえ大丈夫です。食料はありますから。」

ただで泊まらせてもらうのにご飯まで頂いては申し訳ないしな

「そうですか。それじゃあ、部屋に案内しますね。」

「こちらです。とアルスは俺を空き部屋へと案内してくれた。

「ここで泊まってください。布団はその押入れにありますので、」

「分かりました。それでは、お休みなさい。」

「どうぞごゆっくり」

そういつて、アルスは戻っていった。

「ふう、やっと一日目が終わった・・・」

転生一日目から2～3時間も歩いたし・・・

「まあ、一日目からこんなベッドで寝れるとは思ってもしなかったけど」

今日はもう寝るか・・・

五目「異世界の常識」（後書き）

誤字脱字は発見次第修正いたします

六日目「敵との遭遇」

次の日・・・・・・・・・・・・・・・・

「うーん・・・・・・・・」

もう朝か・・・・・・・・

「あ、起こしてしまいましたか？」

ん？ああ、アルスの家でとめてもらっただけ

「いや、大丈夫ですよ。」

「着替えをここに置いておきますね。」

「ありがとうございます。」

やっぱり、礼儀正しい人だ。

「朝ごはんは今作ってますので、出来るまで待っていてください。」

朝ごはんまでご馳走に慣れるとは・・・・・・・・なんて運がいいんだ！！

「分かりました。」

アルスは、この返事を聞いて1階へ降りていった。

さて、着替えるか。ついでに出発の準備でもしておこう。

「これでよし。」

後は、朝飯をご馳走になって、街まで案内してもらっただけだ。

「出来ましたよー」

おっと、朝飯が出来たみたいだ。

「はい」

俺は、返事をして1階へ降りた。

「おおお！」

1階へ降りて目にしたものは、想像していたものより、ずっと立派なものだった。

ピザトーストやマカロニサラダ、コーンスープがあった。

一人暮らしっぽかったからパンにバターを塗ったものだと思っただけだ。

「どうぞ、召し上がってください。」

男の人なのになんて家庭的な人なんだ……これが女性なら好みなんだけど……

「いつ頂きます。」

さて、お味のほうはと……

パクッ

「どう……ですか？」

「うまい！」

「そうですね、よかったあ……」

アルスさんがマジで女性のようなんだけど。ま、いいか

そんなこんなで朝食を食べ終え、今アルスさんは後片付けをしているところである。

「そつえばリョウヤさんって、どこか行く宛てはあるんですか？」

「いや、ありませんけど……取り合えず、大きな町で働いて過ごそうかと。」

「そうですね。」

「よし、終わりましたよ。そろそろ行きましょつか。」

お、終わったみたいだ。

「分かりました。」

こうして、俺は、アルスと一緒に次の街、『リック』へと向かった。

歩き始めて数分後

「結構遠いんですね……………」

「そうですね？それほど歩いてないと思いますが……………」

マジかこの人……………体力も結構あるんだな……………」

その時、突然何かが俺達の前に現れた。

「何だ？アレ？」

見た感じでは前の世界で見たドラ○エのスラ○ム見たいな奴が現れた。

「あれは魔物ですね。」

へへアレが魔物なんだ〜

「随分落ち着いてますね、弱いんですか？あの魔物」

「ええ、よく子供の戦闘訓練で用いられる魔物ですね。」

なるほど

「折角ですし、戦闘訓練でもしておいたらどうです？これから先に魔物とであってそのまま力尽きましたーって言うのがないように」

それもそうだな、やってみるか！！

「そうですね、やってみます。」

「危なくなったら私も加勢しますので、頑張ってください。」

よし、この世界に来て初めての戦闘だ！

六日目「敵との遭遇」(後書き)

更新大幅に遅れてすいません。

次回初戦闘シーンですので更に遅れるかもしれません。

誤字脱字は発見次第修正いたします

七日目「初戦闘&到着」

さて、戦闘になったはいいものの、どうやって戦おうか。

そう考えていると、敵（スラ・ムっぱい）がぴょんととんで体当たりしてきた。

「うわ！」

あつぶねえ・・・よれないわけではないけど、速く攻撃しないと疲れるな。

「あのう・・・剣を持ってないんですか？」

「・・・・・・・・はい・・・」

素直に借りたほうがいいだろうな・・・

「これ、使います？古いものですけどねど」

「ありがとうございます。」

ちなみに、俺が剣を受け取るまで、敵は攻撃してこなかった。

さて、仕切りなおしだ！！

取り合えず相手の攻撃をよけることからやってみようかな。攻撃食らいたくないし

俺がぎこちなく剣を構えていると再び敵がぴょーんと飛んできて体当たりしてきた。

30分後

俺は、この30分の間、守りに集中していたため、敵の攻撃を受け流すことも出来るようになった。

その間、アルスは特に気にした様子も無く何も言っていなかった。

さて、そろそろ攻撃に移るか！

「うおりゃああああ！」

俺は、手に持っている剣で敵を切り付けた。

ぶにゅ、そんな音が聞こえた。

が、

敵は、まったくダメージを受けた様子が無かった。

「え？」

何で食らっていないんだ？

「アルスさん。これってどういことですか？」

「その魔物の特徴は体力は低いけど一撃で体力以上与えないとダメージを受けないみたいなんですよ。」

ちよつ、ええええ……

「つまり、今のは全然ダメージを与えてない?」

「そういうことですね。」

くそ!今ので渾身の一撃だったんだぞ!

そんなことを話しているうちに再び敵が体当たりしてきた。

「うお!」

くそ、このままだとギリ貧じゃないか!どうすれば……………

(がんばつとるか?亮谷)

(戦闘中に話しかけないでくださいよ神様!)

(何じゃ、戦闘中だったのか。)

「うお!」

(そうだ!神様なら何とかなるんじゃないですか?)

(そのくらいの下級の魔物では手助けなんてしないぞ?)

(俺の腕力じゃあ倒せないんですよ。)

しかし、神様補正どこ行った。

（魔法を使えばいいじゃないか）

（魔法使えるんですか！？）

きたあ！！神様補正来た！！

（前に渡したバックがあるじゃろ。その中に魔法の専門書があるからそれに書いてあることを実践すれば使えるはずじゃぞ）

・・・

（読んでる暇が無いんですけど・・・）

（仕方ないのう。下級の炎の魔法を教えてやるからそれでその場をしのげ。）

（わかりました。）

（まず、火をイメージするのじゃ）

ええと、火・・・火・・・

（その後、火を手の上に出すことをイメージするのじゃ）

ううん・・・こんな感じか？

（そして手のひらを空に向けながらこう唱えるのじゃ。『ファイラ』

とな)

「『ファイラ』！」

おお！手のひらの上に火の玉が出てきた！！

「うおりゃあ！！」

俺は、その火の玉を敵に向かって投げた。

その火の玉が魔物にあたり、爆発音がした。

あたり一面煙に包まれた。

その煙が消えると、そこに魔物はいなかった。

「た・・・倒せた・・・」

「お疲れ様です。」

これが魔法・・・

「それにしても、こんなに威力の高い魔法を使えるなんて・・・リヨウヤさんって記憶を失う前って凄い魔術師だったんでしょうかね？」

「普通、どれぐらいの威力なんですか？下級魔法って」

「え！あれって下級魔法だったんですか！！てっきり中級魔法だと・・・」

そんなに強かったのか……………

「えっと、下級魔法の威力ですね。普通、下級魔法は攻撃用としては使われていません。生活補助として使われています。」

「そうなんですか」

「中級魔法以上は攻撃用として使われています。」

なるほど、つまりさっきの威力は中級魔法並みの威力だと……………

「たまに、下級魔法を攻撃に使える人もいますが、ここまでの威力は滅多にいません。」

「はは……………はははは……………」

使うのは控えたほうがよさそうだなあ……………

「さて、魔物も倒しましたし、行きましょうか。」

そして数分後、小さな町『リック』に到着した。

七日目「初戦闘&到着」（後書き）

すいません・・・大幅に遅れました・・・

この話で第1章終了です。

皆様、今まで私の稚拙な文章を読んでいただき、ありがとうございます。

次回から第2章に入ります。

まだまだ続く予定ですが今までの更新ペースが遅いので、今後もしようなペースが続くかもしれませんが、これからもよろしく願います。

また、ご意見、ご指摘なども願います。

誤字脱字などは発見次第修正いたします。

八日目「新たな仲間」

「アルス。これからどうしようか」

「そうですね・・・取り合えず目の前の敵を蹴散らすことを考えてもらえます?」

今現在、俺はコボルトという魔物に囲まれている。

「ここが『リック』ですか。・・・・・・何というか、質素な町ですね。」

「ええ、そこがこの街の特徴ですから。」

この街の特徴・・・ねえ

「アルスさん。ここまで色々と本当にありがとうございました。」

「いえいえ、これからも色々大変でしょうが頑張ってください。」

「それじゃあ、この辺で。」

そうして、俺は村の宿探しに行こうとしたとき、

「ちょっと待ってください!」

アルスに呼び止められた。

「なっなんですか？」

「私を旅に連れて行って頂けませんか？」

「……え？」

「旅って……俺とですか？」

「はい。」

「別にいいですよ。」

「……え？」

「いや、別につれてってもいいですよ？むしろお願いします。」

「いや、マジ助かった。今考えたら宿代持っていないことに気づいたし。」

「そ……それじゃあ、これからもよろしくお願いします。」

「こちらこそよろしくお願いします。」

ふう、ついでにあの人剣士っぽいから魔法も幾分か使いやすくなるだろうし。

「あ、敬語は使わなくていいですよ？名前も呼び捨てで構わないですし、これから長くいることになりそうですしね。」

「あ、そうっすか。それじゃあアルス、取り合えず宿を探しに行きますか。」

「そうですね。」

こうして、新たな仲間、アルスが加わった。

宿を探し始めて5分ぐらい、すぐに宿は見つかった。

「それじゃあ今日はここに泊まるっか。」

「そうですね。」

ちなみに外から見ると、ゲームでよくある木で出来た宿だ。

「お邪魔します。ここに泊まりたいんですけどもー」

「ああ、お客さんかい？ちよいと待っておくれ。」

対応してくれたのは40過ぎかと思われるおばちゃんだった。

「分かりましたー」

再び5分後、俺達は宿屋の部屋に案内された。

「ここがあんたらの部屋だよ。下は酒場になっているから、夕食は

そこでとるといいよ。」

「ありがとうございます。」

ちなみに、アルスとは別室で寝ることになった。まあ、俺にとっても好都合だからいいけど

「それじゃあごゆっくり」

俺は部屋に入った。

部屋の中は、ベッドと箆笥が置いてあるだけの質素な部屋だった。広さは申し分ないけど

「さて、バッグの中身を確認するかな。」

どれどれ……………

「食料五日分と魔法の使い方の本と……………何だこれ？」

中に入っているものの一つにカードみたいなものがあつた。

「……………神様に聞いてみるか……………」

（神様、聞こえますか？）

（ん？なんじゃ？）

よしよし、ちゃんと聞こえているようだな

（このカードのことなんですけど）

（ああ、それか、それはの、おぬしのステータスを示すことが出来るカードじゃ）

（俺の？）

（そうじゃ、使い方はとっても簡単。カードを持って自分のステータスを知りたいと念じるだけ！）

（なるほど・・・）

（ちなみに服の中に入れておくだけでもいけるからの、常時身につけておくといいじゃろ）

（ありがとうございました。）

なるほど、これは役立つかもしれない。

「他にはっと・・・これは、杖？他にもローブとか出てきたな・・・」

まあ、装備品ならありがたいかな

「後は何かあるかな？っと・・・ん？魔物図鑑？」

これは再び神様の出番だな

（神様、魔物図鑑って何ですか？）

（その名の通り魔物図鑑じゃ、魔物と出会ったびに記録されていく。）

ポケ•ンかよ!!

（という事は、あのスライムっぽい奴も記録されているのか。）

（そういうことじゃ）

（ありがとう、神様）

まあ、こんな感じかな？後はもう何も入ってないし

後で魔法の練習でもしようかな。夜中に

八日目「新たな仲間」（後書き）

八日目であり、記念すべき（？）第2章第1話です。

毎度のごとく更新ペース遅いですね・・・

出来るだけ早くしたいと思っていますが・・・

なににせよ、第2章もマイペースに頑張っていきますのでよろしく

お願いします！

誤字脱字は発見次第修正いたします

九日目「魔法の練習」

九日目

さて、夜になるまで本読んでおくかな

「んゝとなになに？魔法には主に三種類あり……………」

ええと、本を読んで分かった事。

・魔法を使うには、MPが^{マジックポイント}必要であり呪文の詠唱が必要なものもある。

・魔法には主に、『治癒魔法』『補助魔法』『攻撃魔法』の三種類がある

・魔法の強さには、『下級』『中級』『上級』の三段階があり、それぞれに長所と短所がある。

・魔法には『炎』『水』『木』『風』『光』『闇』の六属性があり、それぞれに違った性質を持つ

・属性間での相性などは存在しない。

それぞれの魔法の特徴

・治癒魔法：回復の魔法。この魔法の属性は全て光で統一されている。

・補助魔法：色々な能力を上げたり、相手を惑わせたりする魔法。この魔法の属性は『炎』なら力アップ、『風』なら素早さアップといった具合に、魔法の効果によって違う。

・攻撃魔法：その名の通り、相手を攻撃する魔法。この魔法も補助魔法と同じように効果によって属性が違う。

それぞれの位の特徴

・下級魔法：補助魔法以外の魔法が存在する。
治癒魔法は回復量が少なく、擦り剥いた傷を治す程度。
攻撃魔法は、威力が低く、攻撃用としては使用しにくい、形を変形できるなど、応用がしやすい。
呪文の詠唱は不要。

・中級魔法：この魔法を習得すると、魔導師と呼ばれるようになる。
補助魔法が使えるようになる。補助魔法は、相手の能力を下げるか、味方の能力を上げる事しか出来ない。
治癒魔法は回復量がかなり上がり、実践で使えるレベルまでに。攻撃魔法のほうも威力が格段に上がったが、魔法の形を変えるなどの応用がしづらい。

呪文の詠唱は、ある程度魔力があれば省けるがすべては不可能。

・上級魔法：この魔法が使えると大魔導師とまで呼ばれる。
補助魔法は相手に、幻影を見せたり、自分を空に飛ばしたりなど、いろいろなことが出来るようになる。
治癒魔法のほうも、蘇生魔術を使えるようになり、回復量は体力全快まで回復する。
攻撃魔法は、かなりの威力を誇る魔法が使える。さらに、違う魔法同士を合体させて使うことも出来る（かなりMPを消費する上、かなりの魔力が無いと使えないが）。
そのかわり、応用が一切効かず、呪文の詠唱も省くことが出来ないため、唱えきる前に攻撃される可能性が高い。

それぞれの属性の特徴

- ・炎：基本魔法。攻撃系の魔法が多い。
- ・水：基本魔法。補助形の魔法が多い。

- ・木：それほど種類が多くない魔法。その代わり、威力はそこそこある上、応用がよく効く。
- ・風：補助系に多い魔法。空を飛んだり、素早さを上げたりする。
- ・光：治癒魔法の属性。そのほか、下級魔法に存在する。
- ・闇：攻撃系に多い魔法。自分自身を闇に変えたりも出来る。

こんな感じになる。

そろそろ皆寝静まる頃かな。

よし、いくか！

こうして、俺は魔法の練習に行った。

さて、現在、宿屋の裏手のほうにある広場に来ている。

理由は簡単、魔法の訓練にちょうどいいからだ。

「さつて、始めようかな。」

ええと、前にやったときは、炎だったから、今度は水でもやってみようかな。

「水……水……水……」

俺は、前回魔物との戦闘時の時のような感じで水の玉を出した。

「こんな感じかな？」

結構簡単だな。そういえば魔力とかどうなっているんだろうか

「あっこういうときに確認するのか。」

俺はステータス確認と唱えると、頭の中にこんな文が脳裏をよぎった。

HP : 50 / 50
MP : 20000 / 20010
力 : 5
守 : 11
魔力 : 20000
素早 : 10

何だこのバランスは・・・・・・・・・・

というか力とか守とか素早とか低すぎだろ！その代わりに魔法関連は何故か凄く高いし！

「このステータスで接近戦をやったら間違いなく死ねるな・・・・・・・・」

それはさておき、下級魔法の消費MPは5ポイントぐらいだろうな
そついや、MPの回復はどうなっているんだろうか。

「まあ、他にもやってみるか。」

まずは、応用で防御でもしてみようかな。

「ええと、まずは魔法の属性をイメージして……………」

ちなみに魔法の使い方は、まず属性の設定、その次に出現場所の設定。最後に形の設定という順番でやると出来るらしい。

今回は炎でやってみようと思う。

「出現場所は目の前、形は壁……………」

すると、目の前にゴウという音を立てて、炎の壁が出てきた。

「こんな感じが……………結構使えるかもしれない。」

壁にするなら何がいいだろう……………

炎の壁は大丈夫だろうな。なんたって炎だし

水の壁……………は役に立たないだろうな。

木の壁は純粹に使えるそう。

風の壁とか光の壁とか闇の壁とか使い道はほぼゼロに近いと思う。

風の魔法だったってただそよ風起こすただけだもん……………

闇は姿を隠せるみたいなんでいいとして、光もなあ……………

どっかの木で威力試せないかな？

それは置いて、次は中級魔法試したいんだが、よく考えたら呪文なんか知らないな……

これは神様の出番か？

（神様ーちょっといいですかー？）

さて、出てくれるのかな？

（何じゃ？こんな夜中に）

（実は中級魔法のことなんですけど、呪文がわからないんです。）

（ああ、そのことが。それは自分で探し出してくれ。）

……え？今なんと？

（自分で……探せ？）

（そう。中級魔法ならたいてい魔導書とか魔術書とかに書いてあるじゃろうし、魔法学校なるものもある。自分で探してくれ。）

（そ……そんなぁ……）

（しょうがないのう。一つだけ教えてやろう。）

（まじすか！早く教えてください！）

（呪文は、魔術言語と呼ばれるもので構成されている。）

（ほうほう）

（それを組み合わせることで呪文が出来る。）

（なるほど）

（明日にでも魔術言語のルールとかを書いた本を送るから、それを観て自分で作ればよからう。）

・・・・・・・・まじすか・・・・・・・・

（わかりました・・・・・・・・・・）

（それじゃあ、わしはそろそろ寝るから。）

（お休みなさい。）

まあ、いいか。自分で魔法作るなんて結構面白そうだし。

九日目「魔法の練習」(後書き)

第二章第2話でした。

文字数が安定しない上、投稿スピードも安定しない……

会話文が多かった気がしますますが読みにくいですかね？

読みやすいかどうか教えていただくと嬉しいです。

誤字脱字は発見次第修正いたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9287w/>

青年の異世界冒険記

2011年11月13日20時03分発行